

小学校教員の英語発音

—発音の実態と課題—

Teachers' English Pronunciation in Japanese Primary Schools:

A Pilot Study

有本 純*

河内山 真理*

Jun ARIMOTO

Mari KOCHIYAMA

抄 録

本調査は、小学校教員の英語発音の実態を調べ、研修に必要な項目を洗い出して、教員研修プログラムを構築する為のパイロットスタディという位置づけである。予備調査の結果を教職課程の学生と比較し、共通点と相違点を明らかにし、教員研修で行うべき項目を絞り込んだ結果、日本語の近似音による代用、英語の音声変化に関する知識の欠如などが見られた。これらを踏まえて、教員研修の暫定案を提案している。

1. はじめに

2020 年度から、小学校では英語が 5・6 年生は教科に、3・4 年生に外国語活動として完全実施され、6 学年中 4 学年が英語を学ぶことになる。現在でも、小学校での英語活動は音声中心で進められており、教員の英語発音能力は教室の指導に欠かせない要素であるが、これまでの小学校教職課程においては、英語の発音に関する科目は免許の取得条件には含まれていない。現在の教職課程は、2019 年度入学生から新課程に移行しており、英語については新たに 2 単位程度の「外国語の指導法」と 1 単位程度の「外国語に関する専門的事項」に関する科目が必修となり、外国語(英語)コアカリキュラムに示された内容を網羅しなくてはならない。そのコアカリキュラムでは、「外国語に関する専門的事項」で、英語に関する背景的な知識として、「英語に関する基本的な事柄(音声、語彙、文法、正書法等)」、授業実践に必要な英語力として「授業実践に必要な話す力[やり取り・発表]を身につけている」という程度は音声に言及しているが、発音指導については具体的な指示が依然として示されていない。

また、現職教員は、一部を除き、英語の指導を前提としない教職課程を履修した者が大多数を占める。その小学校の教員の英語発音について、実態把握のためにパイロット調査を行った。本稿は、調査結果をもとに、授業で利用できる発音を修得するための教員研修プログラム構築を目指す研究の端緒としている。

2. 先行研究

大野(2017)によると、小学校教員が英語授業を行う際の不満として、68.2%が研修の不備を指摘している。教員研修について粕谷(2017)は、英語の研修内容で重要度の高い項目として、聴くこと・話すこと・読み聞かせ・発

* 関西国際大学国際コミュニケーション学部 教育総合研究所学内研究員

音・音声学の知識などを挙げており、英語運用に必要な基本的知識としては、英語の基本的な音声の仕組み・プロソディや音声変化・発音と綴り字の関係などを示している。独立行政法人教員研修センターでは、講義と実践指導で5日間30時間もの研修を組んでいるが、海外と比較すると、例えば台湾では小学校教員対象に360時間もの研修が実施されており、英語が教科化されている韓国でも、上級コースで20時間245時間、基礎コースでは120時間を確保している。これらの事実から、日本での小学校教員を対象とした英語研修制度の脆弱さは明らかである。

教員免許取得の際に、英語の音声指導法については十分な学習機会がないため、特に音声面を重視する現在の外国語活動では、学級担任による音声指導が十分にできないことが、大きな課題となっている。英語が教科化されると文字指導も導入されるが、小学校の外国語活動では、主として音声を用いた指導が求められている。指導者としては、英語専科の教員やALT、地域のボランティアなどのサポートを得ている場合もあるが、泉(2007)では、実質的には担任主導でALTとのteam teachingが望ましいとの意見で、小学校英語教育学会だけでなく現場でも意見は一致している。しかしながら、教員自身も発音やスピーキングには大きな不安を抱えており、それに応える自治体主催や校内研修は十分な量では実施されていない(樋口2013、松宮2013)。卯城(2018)は、小学校教員やそれを目指す学生が、英語に対して持つ苦手意識の一つに、発音がうまくできないと言う点があると指摘している。また、大野(2017)も、小学校教員の67%は英語が苦手、60%が英語の指導に負担感を感じていると報告している。

このような状況を踏まえ、将来教員となる教職課程の学生については、筆者らの先行研究によって課題があることが半明している(有本ほか2015、河内山ほか2019)。例えば、単音では母音/æ-/ʌ/の区別や母音挿入、子音の/l-r/、/f-h/、/s-i-/、/v-b/などの区別が難しい。また、プロソディでは、強弱のリズムとイントネーション(特にピッチ変化)が困難であることもわかっている。本研究では、現職教員についての問題点を明らかにするために、以下のリサーチ・クエスチョンを設定した。

Research questions

- 1) 教職課程の学生が抱えている発音に関する問題点と現職の小学校教員とに共通点があるか
- 2) 教員になる前に習得すべき項目や音声に関する授業は、どう在るべきか
- 3) 英語発音に関して、現職の研修には何が必要か

本稿では、これらの課題に対するパイロットスタディという位置付けで、1)について調査し、3)についての暫定案を提案することとする。

3. 発音調査

3.1. 調査項目

先行研究の結果を基に、小学校で使用するclassroom Englishなど頻度の高い語句や文を10項目選んだ。各項目のターゲットと誤り例は、以表1の通りである。調査用紙と用いた英語は、末尾に附録として掲載している。

表1. 調査項目一覧と誤り例

No.	items	target	誤り例	No.	items	target	誤り例
1	hot	/ɑ/	ア・オ	8	1, 2, 3, go!	/wʌn/	ん
2	think	/θ/	s シ			/tu/	ツー
3	an apple	/næ/ linking	アンア			/θ/	ス
		/æ/	ア			/oo/	ゴー
		/l/	ル母音挿入				
4	very good	/v/	b ベ	9	Let's read this.	/t/	リ
		/d/	ド母音挿入			/d/ elision	ド母音挿入
5	sing a song	/si/	シ			/ð/	d ディ ジ
		/ŋə/ linking	グア			falling	中途半端
		/ŋ/ vs. /ŋg/	グ				
6	cup of coffee	/pə/ linking	プ オブ	10	Play with your friends.	/p/	プ母音挿入
7	boys and girls	/zə/ linking	ズアン			/ðj/ 結合	ジュ
		/d/ elision	ド母音挿入			/f/	フ

3.2. 調査協力者

兵庫県および大阪府の公立小学校の現職教員 28 名が調査に協力してくれた。手順は、表1の語句や文が書かれたシートを見て読み上げ、IC レコーダーで録音するというものである。対象となる英語の語句を読み上げる前に、黙読し、発音がわからないものがないか確認したり、練習する時間を取ったりした。また、比較として、教職課程履修学生 19 名（英語音声学受講者）の音声を用いた。

3.3. 評価方法

筆者ら2名による合議による評価で、2、1、0の3段階で評価した。各段階の基準は、2は「コミュニケーション上問題のない発音」、1は「acceptable だが若干の矯正を要する」、0は「まったく別の発音をしており、十分な矯正を必要とする」である。

4. 分析と考察

4.1. 結果

まず、項目別得点(2点×28名＝56点)と個人別得点(2点×24項目＝48点)の結果をまとめたのが、図1である。項目別平均点は35.0、個人別平均点は25.45であった。項目別よりも、個人のバラツキが出る傾向にあった。

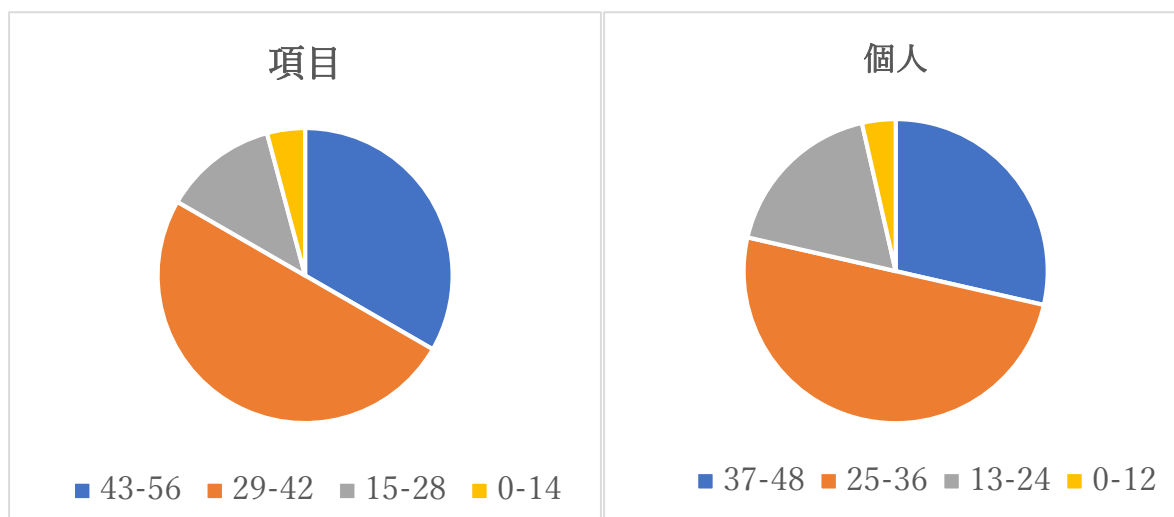


図1. 項目別および個人別得点分布

また、項目別の結果は、以下の通りであった。

- 1) 良好な項目 : one /wʌn/, play, and, two /tu:/, good, read, apple, go
- 2) 比較的良好な項目 : sing・song, sing, hot, think, an apple, read, falling, sing a, apple, boys and, this, with your

ただし、これらは、もう少し矯正が必要とされるレベルである。

- 3) 矯正が必要な項目 : 6. cup of (連結)、8. Three /θ/, 10. friends /f/
- 4) 特に課題の大きな項目 : 4. very /v/

次に、誤りの傾向をまとめると、以下のようになった。

- 1) 子音 /θ ð/ : 日本語にない子音で、サ・ザ行音への置き替え傾向がある。
- 2) 子音 /f v/ : 同じく、日本語にはない子音で、ハ・バ行音への置き替え傾向がある。
- 3) 一部の連結 : cup of が切り離して発音されている。

さらに、教職課程の学生との比較をした結果は、以下の通りである。

- 1) 良好な項目・比較的良好な項目が大半を占めていた (平均 36.37/48 点)
- 2) 矯正が必要な項目 : very /v/, friends /f/, think, three /θ/, a cup of の連結
- 3) 致命的な項目 : なし

結果として、両者に共通する誤りは、日本語にない子音 /f v θ ð/ であった。これらの子音は、日本語にない音であることから、日本語の近似音に代用される傾向が顕著に見られた。連結に関しては、a cup of のみに問題があったが、その他の連結はできていたので、矯正指導は容易に可能である。

4.2. 分析と考察

問題点として、子音で日本語音による代用傾向が見られた。その原因は、基本的な調音法を学んでいないこと、発音の矯正指導を受けた経験がない、という2点が考えられる。また、音声学の基礎的知識を学んでいないために、「連結」についての知識が不足しており、どのような場合に連結するのかが分かっていないことも、推察される。

次に、教員の場合、個人差がかなり大きく出ている。平均点が 25.45 に対して、最高点が 46 点、最低点が 3 点であった。まだ一部の教員に対する予備調査であることから、一般化した結論的なことは言えないが、小学校教員が児童の発音モデルになるための対応が遅れていることを示している。2020 年 4 月から小学校で英語が完全実施されることにより、担当する小学校教員は大きな不安を抱えている。特に、英語音声学の基礎訓練を受ける機会が、今後必要になるであろう。その為に、都道府県の教育委員会が主導で、より多くの教員が受講できる配慮と実施が望まれる。学会の 1 つとして、日本音声学会も動き出しており、小学校教員を対象とした研修会を各地で開催し始めている。

5. 研修内容

俣野(1999)によると、小学校教員対象の校外研修会では、主として新学習指導要領・新教材の理解や教材活用に関する内容が多く扱われており、最大の不安要因である英語力や指導力強化が十分に扱われていないのが実態であると述べている。今後は、体験型の研修により不安要因を取り除く内容を構築する必要がある。

今後、教員の発音能力向上のために、実施する研修内容の素案を以下に提示し、今後の議論のたたき台としたい。

1) 発音診断テストとフィードバック

発音の問題は教員個人によって差があることから、個別の診断テストにより問題点を発見し、矯正箇所を重点的に治していく必要がある。その到達レベルは、国際語としての英語発音(EIL: English as an International Language)である。

2) 英語と日本語の音声の違い

両言語の母音・子音の体系、リズムとイントネーション、に関する知識を学び、共通点や相違点を知ることで、指導の参考にすることができる。また、発音記号とその音声化の練習も含める。

3) 基礎訓練

調音と聴き取りの練習を行う。内容は、母音・子音といった個別音だけでなく、連結・脱落のような音声変化も含む。さらに、プロソディ（強勢・イントネーションなど）がコントロールできる訓練を受ける。

4) 導入の指導法

発音のモデルと目標(EIL)の区別をして、児童に分かり易いことば遣いで、調音の説明の仕方や指導上の注意点を学ぶ。従来のほとんどの文献や指導書では、英語音声学の説明を書き換えていたり平易にしたものであったが、それでも実際の指導には使えない記述ばかりであった。

5) 矯正の指導法

日本語話者に生じ易い誤り発音の傾向を知ること、実際の調音が予測ができるようになる。また、実際に様々な発音を聞くことにより、矯正指導への気づきがあり、それらを活用して指摘の仕方も実践的に学んでいく。特に、日本語母語話者が英語発音をする際に起こすと予測される傾向を学ぶことで、容易に矯正すべき箇所への気づきができるようになる。例えば、上述した通り日本語の代用音を用いる傾向、一部の母音の区別が出来ない(/æ a ʌ/)、文強勢を正しく置くことができない、ピッチ変化に乏しい(ピッチ幅が狭く平坦)、連結や脱落などの音声変化ができない、特に摩擦音で摩擦が生じない、英語が閉音節であるのに対して、日本語は開音節

であることから母音挿入をするなどである。

6. おわりに

小学校での外国語や外国語活動は、電子黒板等の補助教材を使用すれば適切な音声モデルを提示することはできる。しかしながら、実際に活動を行う際には教員の指示やモデルが必要となる。実際の授業でも、補助教材を使った練習後のアクティビティでは、教員が「カタカナ英語」を使っていると、多くの児童が「カタカナ英語」の発音になっていたケースも見られた。ここで言う「カタカナ英語」とは、主として母音挿入による開音節を形成する発音を指しており、例えば *place* /pleis/ が英語で 1 音節であるのに対して、プレイス /pureisu/ では、4 音節になり、すべてが母音で終わる開音節になるような発音のことである。

しかし、学級担任が英語を指導する場合に、普段日本語を話している教員が突然英語を話すことに多少の抵抗感を持つ児童もいる。発音に注意しすぎて、不自然になったりするよりは、まず教員が積極的に且つ気負いなく英語を用いている様子を児童に見せることが肝要と考える。同時進行で、少しずつ英語の発音にも注意を払い、できれば児童にも英語らしい音を認識させ、指導できれば、その後文字や綴りを学習する際に、フォニックスを活用して英語の音と一致させることができ、たとえば *r* と *l* を混同するなどのエラーが減ることが期待される。日本語では、英語の *l* も *r* もラ行音になる為に、ライトは *right* なのか *light* なのか区別がつかない。また、*relax* がリラックスと発音されると、綴り字で *r* と *l* を間違える原因になる。

ただし、これを実現するには、教員が気負わず発音できる程度に英語の音声进行学习し、また指導法を学ぶ機会が必要だが、研修がまったく不足しているのが現状である。今後は、必要最小限の矯正訓練により、適切な発音を用いた指導が期待される。

本研究を進展させ、研修などを通じた解決策、教員になる前に習得すべき項目や音声に関する授業の在り方についても提案する予定である。

*本稿は、2019 年 8 月に開かれた全国英語教育学会 第 45 回弘前研究大会（弘前大学・文京町キャンパス）で発表した内容を加筆・修正したものである。

参考・引用文献

有本 純・河内山真理 (2015) 「教職課程履修者における発音能力と態度に関する調査研究」

『関西国際大学コミュニケーション研究叢書』第 13 号, 27-33.

樋口忠彦 (2013) 「外国語活動の成果と課題」樋口忠彦 (編) 『小学校英語教育入門』東京, 研究社.

泉恵美子 (2007) 「小学校における担任の役割と指導者研修」『京都教育大学紀要』110, 131-147.

粕谷恭子 (2015) 『英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業』平成 27 年度報告書, 東京学芸大学.

河内山真理・有本 純 (2019). 「教職課程履修者の発音記号に対する認識と定着度」

『関西国際大学教育総合研究所叢書』第 12 号, 89-99.

俣野知里 (2019) Development of an In-School Training Program: Reducing Elementary School Teacher's Anxiety Toward Teaching Foreign Language Activities. 京都教育大学大学院修士論文.

松宮新吾 (2013) 「小学校外国語活動担当教員の授業指導不安にかかわる研究」

『関西外国語大学研究論集』 97, 321-338.

村野井仁 (2018) 『コア・カリキュラム準拠 小学校英語教育の基礎知識』 東京, 大修館書店.

大野彰子 (2017) 『プロジェクト研究「小学校英語教育に関する調査研究」について』 国立教育政策研究所,
平成 27・28 年度プロジェクト研究成果報告会資料.

卯城祐司 (2018) 『初等外国語教育』 京都, ミネルバ書房.

附録 調査用紙

小学校の先生方の英語発音について実態調査をしています。

お忙しいとは存じますが、録音にご協力下さい。

関西国際大学 有本 純・河内山真理

次の語句や文を発音して下さい。

1. hot
2. think
3. an apple
4. very good
5. sing a song
6. a cup of tea
7. boys and girls
8. 1, 2, 3, go!
9. Let's read this.
10. Play with your friends.

Abstract

This paper is a pilot study aiming at investigation of pronunciation ability by elementary school teachers who will give English instruction at schools. MEXT has already announced that all the elementary schools will begin English language teaching as a required subject for 5th and 6th graders and also as an English activity for 3rd and 4th graders in 2020, however, most teachers have not trained teaching English in their teachers' license course at universities. A matter of concern is whether they can use proper instruction in English, especially pronunciation abilities. Recording and analyzing their pronunciation resulted that they could not give acceptable pronunciation as a model, they need enough training to acquire pronunciation ability. We showed the preliminary program for them and will propose the entire program in the next research.
